様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（英語） ／杉浦　裕子

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

〇教員を目指す（あるいは現職の教員の）学生が持っておくべき英文読解力と英語の文化背景を身につけてもらうという視点から英文学の講義を担当する。特に、この2年間を通じ、学生にとって英文を読む機会が授業内外で少ないことを鑑み、自分の担当する授業の中では確かな読解力を鍛えさせたいという思いを強くしている。また、英語に携わるものとして聖書・シェイクスピア・マザーグースに関する知識は欠かせないと言われていることから、授業でシェイクスピアとマザーグースに接する機会を与える。
〇英文読解の授業実践としては、まず文学作品の精読を通じて英語をコンテキストとともに理解してもらう。また、目で文字を読むだけでなく劇作品のセリフを声に出して読むことで、セリフと感情と音のつながりを体得してもらう。

2．点検・評価

英文読解力の養成と、英語の歴史・文化背景を知るという観点から授業を行った。 具体的には

〇学部1年生対象の「英文講読」では、オー・ヘンリーのやや骨のある英文の精読を行った上で、グループディスカッションによって読みを深め、また19世紀末のアメリカの社会背景を視野に入れたテーマ設定でレポートを課した。
〇学部1年生対象の「英語基礎研究」では、身近な英詩の鑑賞を導入として、マザーグースやシェイクスピア、ワーズワースといった英語文化に触れてもらった。
〇学部2年生対象の「英米文学研究１」では、近代劇を扱い、読解力に磨きをかけるとともに、台詞の練習をとりいれて、台詞と感情と発話のつながりを体得してもらった。期末試験は上演形式で行った。
〇学部2年生対象の「英文学史」では、イギリスの代表的な作家と作品を、歴史的背景とともに理解してもらった。学生による発表形式を取り入れ、一度はディケンズ作品の映画も見せて、時代や作品の印象が学生の胸に深く刻まれるようにした。レポートでも、作品から歴史背景をさぐるという形の課題を出した。
〇学部3年生対象の「英語リーディングⅡ」では、短編小説の速読、および英語でのディスカッションや感想のライティングを通して、「読み・書き・話す」を総合的にブラッシュアップさせる授業を行った。
〇大学院の「英米文化研究Ⅰ」では、今年はシェイクスピア劇を幅広く取り上げ、発表と講義をとりまぜながら、多くの劇の様々なテーマについて議論することで、シェイクスピアになじみがない大学院生にもある程度の知見を与えることができた。
〇大学院の「英米文化研究Ⅲ」では、現代劇を一本細かく読んで、受講生とさまざまな討議を交わし、深い理解を得るができた。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

〇新二年生の担任として、学生の様子を把握しながら生活・学習の支援を行う。特に学習面では、大学での授業に加え、ネットアカデミーを用いた自己学習や英検準一級取得に向けた学習を奨励して、英語力そのものを底上げする支援をする。
〇大学院・学部のゼミ生の研究を支援し、ある程度のレベルの論文を書けるように指導するとともに、採用試験対策としての英作文等も指導する。
〇その他の英語コースの学生や、授業で接する学生達とコミュニケーションをはかり、必要な支援やアドバイスを行う。

2. 点検・評価

○学部2年生の担任として、学習キャリアノートのチェックと面接、合宿研修、日頃の授業を通して学生の様子を把握した。また、英検準一級の対策本(参考書)を配るなどして、自己学習を奨励した。けれどもネットアカデミーを用いた自己学習については、実際に「英語リーディング」の授業で担当しているコースの学生に対してしか奨励できなかった。 英語コースの2年生に対して、授業以外で実際どの程度英語力の底上げを支援できたかというと、少々疑問が残る。
○大学院・学部生に対してそれぞれ週1回、2時間のゼミ指導を行い、ある程度のレベルの卒論・修論を書かせることができた。採用試験前は英作文、その他の指導も行った。大学院のゼミ生は3つの件で採用試験に合格したが、これは本人の努力の賜である。学部生にも採用試験後、進路の相談にのったりやアドバイスを行った。
○その他英語コースの学部生・院生から相談(留学相談、進路相談など)があったときに、適宜アドバイスした。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

○平成20年度から科研費の共同研究として行っているシェイクスピアの材源・改作に関する研究を引き続き行う。 今年度は最終年度にあたるため、研究成果をまとめるとともに、メンバーとともに10月の日本英文学会九州支部大会でシンポジウムをおこなって研究成果を発表する。
○7月に熊本県立大学で催されるトマス・グラバーに関するフォーラムで、『グラバー伝』の翻訳者(共訳)として研究発表を行う。
○エリザベス朝研究会で申請した科研費が採択された場合、その研究計画に基づいて共同研究を行う。
○個人研究として、劇場戦争に関する研究を進め、論文を執筆し、紀要または学会誌に投稿する。
○英語コースの機関誌である『鳴門英語研究』に研究論文または研究ノートを発表する。

2. 点検・評価

○科研費の共同研究で行っているシェイクスピアの材源・改作に関する研究を完成させ、研究成果をメンバー全員で日本英文学会九州支部大会のシンポジウム(10月29日開催)で発表し、報告書もまとめた。
○7月に熊本県立大学で開催された文学部フォーラム『トマス・グラバーと近代日本の曙』(7月23日開催)において、三人の講演者の一人として講演した。
○グラバーに関する論文をまとめて、『鳴門教育大学研究紀要27号』に投稿した。ちなみに、翻訳した『グラバー伝』は岩波から出版間近である。
○エリザベス朝研究会で申請した科研費が採択されたので、その研究計画に基づいて，夏に渡英し、二つのテーマに沿って資料収集および研究活動を行った。
○劇場戦争期における少年劇団について、一つ論文をまとめて2012年3月末に発行予定の『鳴門英語研究』に投稿した。また、関連したテーマで来年度の学会発表に向けて準備中である。
○2011年3月末発行の『鳴門英語研究』に研究ノートを発表した。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

○英語コースの中で諸先生方と協力し合い、コースに貢献する。
○担当の委員会や専門部会(地域連携委員会、教職実践演習委員会、実地教育専門部会、モデル・コアカリキュラム開発チーム、先導的委託事業)の仕事を粛々と行う。

2. 点検・評価

○英語コースの諸先生方と連携を取りながら、コースの運営に貢献していた。
○学部教務委員会、それに付随するいくつかの専門部会、地域連携委員会の委員として、粛々と仕事を行った。今年度英語コースからの学部教務委員として最大の案件であった「小学校英語教育論」の新設についても、ほぼ準備が完了した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

〇地域連携センター主催の公開講座、免許更新講習、松茂町立図書館での大学連携講座などを通じて、自身の英国演劇に関する研究を紹介し、特にことばの力について考えてもらう。
〇附属学校での研究会参加や教育実習見学や授業を通して大学と附属学校の連携を図る。
〇留学希望の学生の相談に乗る。
〇教育支援アドバイザー制度に登録し、需要があれば地域の中・高などで生徒、教師、保護者を対象に、学校教育に資することのできそうな文学講義をする。

2．点検・評価

〇地域連携センター主催の公開講座は受講希望者が1名しかいなかったため開催しなかったが、免許更新講習は予定通り行った。講座では、英文をコンテキストとともに読むこと、および言葉の力について現職の先生方に考えてもらった。松茂町立図書館での大学連携講座は11月に行い、好評を博した。文学の話題でも、松茂町立図書館では受講生が集まるのに、大学の公開講座で受講者が集まらないのは残念である。宣伝方法をもう少し考えてもらいたい。
〇附属学校における学生のミニ実習（7月実施）や教育実習見学を通して大学と附属学校の連携を図った。
〇留学の情報を、担任をしている学年や授業で会う学生にまわして、申請希望者の相談に乗っている。
〇教育支援アドバイザー制度に登録しているが、声がかからなかった。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

本学で3年目となってコース内およびカリキュラム全体の中で自分が担当する授業の位置づけがわかるようになってきたので、何を目標として授業を行うべきかがクリアになり、「英文読解力」と「文化・歴史背景」を核としながら学部1年生から3年生までの授業を系統立てて行えるようになった。

また、卒論・修論指導では、英語で書くということと、アカデミックな内容という二つの面を指導しなければならないが、その両方に於いてある程度のレベルの論文を書かせることができた。

授業準備やゼミ指導は時間をかけて行っており、本学の教育に十分貢献していると言える。

研究の面でも、ほぼ目標通りのことを行うことができた。